

資料

出雲市西谷遺跡三号墓第一主体の
墓坑下底埋土中の礫

渡 辺 暉 夫*

Cobbles~pebbles used as inside base of an ancient grave
of the Nishinotani remains, Izumo City.

Teruo WATANABE

はじめに

西谷三号墓を含む西谷墳墓群は出雲商業高校東の丘陵地にある。この墳墓は弥生時代後期(2~3世紀頃)の山陰地方を特徴づける四隅突出型という特異な形をした墳丘墓である。中でも三号墓は1983年以来島根大学の考古学教室を中心とする調査団によって発掘が行なわれ、墳頂部の埋葬施設の1つの調査が完了した墳墓である。調査結果によると、「墳頂にあけた大土壌のなかに、まず木棺をおさえるための木製の外箱(榔という)を据え、なかに木棺を入れて土壌を埋め戻し、墳頂部に厚く盛り土をしたのち、おびただしい土器類を供えて祭祀を行なったことがわかった」(渡辺貞幸, 1986)。

本報告で扱う礫は上記木榔棺の下底にうめられているものである。礫の採集は島根大学の調査団によって行なわれ、渡辺貞幸助教授の依頼によって、ここに簡単に記載を行うものである。

礫の記載

礫は全て優白色岩石より成り立っており、中礫~大礫サイズのものである。花崗岩や酸性凝灰岩由来の礫の中には風化によって外形が崩れてしまっているものがあるが、ほとんどが円礫~亜円礫である。極円礫も一部含まれる。相対的に硬質の礫に以下の4種類が識別された。

1 石英アプライト(図版左上)

鏡下の観察によると不定形石英の集合であり、石英には弱い波動消光やダスト状包有物の線状配列が認められる。石英の粒間には白雲母が見られる。極めて硬

く、よく円磨された礫である。

2 白雲母-石英岩(図版右上)

白色を呈するが褐色の細い斑点が広がっている。鏡下の観察によれば褐色の部分は風化で汚染された部分であり、黒色の不透明物質で周辺に細粒の褐鉄鉱をともなう。石英(比較的等粒状)と白雲母を主体とする岩石で、白雲母の粒度は変化に富み、形態識別が困難な細粒結晶の集合から卓状で劈開の発達した自形白雲母(長さ0.3mm)が見られる。英雲岩と見られるが産状が不明なのでこの用語を用いないことにした。グライゼン化作用に伴う鉍石鉍物は確認していない。

3 花崗岩質岩(図版左下)

比較的礫形をよく保存しているが、表面はや・もろく、手でこずることによって、鉍物粒がはがれ落ちる。鏡下の観察によると主体は石英と長石であり、長石は部分的に褐色に汚染されて縞模様~格子模様が見られる。一部にパーサイト構造が認められ、長石の多くはアルカリ長石であろうと思われる。石英は図版に示されているように他形である。石英・長石の他に自形~半自形の黒雲母およびこれに密接にともなわれる鉄鉍石が存在する。黒雲母は風化のため劈開にそって変質しているが、黒雲母特有の高い干渉色が確認できる。

4 石英斑岩(図版右下)

径1~3mmの石英斑晶の認められる礫で、弱い流理構造のようなものが認められるほか、白濁した斜長石斑晶の形に似た斑状部も認められる。鏡下の観察によれば融食された石英ないし半自形の石英斑晶が認められ、周囲は主に細粒の石英および白色雲母でうめられている。白色雲母の濃集部は斜長石より変質している場合もあると思われる。他に不透明鉍物が散在する。

* 島根大学理学部地質学教室

以上記述したように礫は中国山脈によく見られる酸

性火成岩類より由来しており、円礫度から川床礫を採集したものであると思われる。墳墓の近くに産する比較的優黒色の安山岩や玄武岩由来の礫が全く認められなかった。

文 献

渡辺貞幸，1986：古代出雲の栄光と挫折，王権の争奪
（直木孝次郎編）集英社，p 95-128.

図 版 説 明

左 上 石英アプライト
右 上 白雲母-石英岩
左 下 花崗岩質岩質岩
右 下 石英斑岩

線の長さは0.5 mm

